NPO等の震災復興取り組み事例集

復興ing

地域の宝はシニアの力
いきいきと活躍できる居場所であれ
特定非営利活動法人 びば !! 南三陸

食堂運営から地域コミュニティの拠点へ
一般社団法人 ワタママスマイル

組織の舵を切ることで
パートナーを見定めた
一般社団法人 Bridge for Fukushima

vol.2

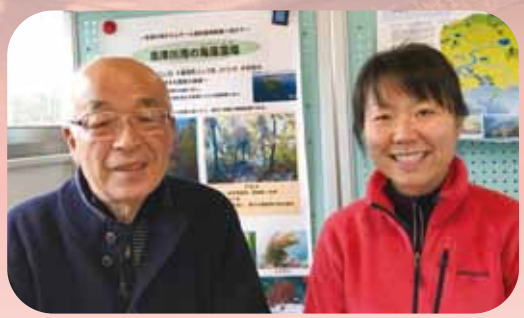
平成29年度宮城県NPO等による絆力を活かした震災復興支援事業

地域の宝はシニアの力
いきいきと活躍できる居場所であれ

特定非営利活動法人 びば!! 南三陸

7割が森林の南三陸町ですが、農業、水産業、林業、そして観光業が盛んです。その担い手は、60 歳を過ぎたシニア層も多く、現役で働いている町民も少なくありません。しかし、確実に少子高齢化は進んでいます。地域活動の担い手や福祉の現場では担い手がなく、人手不足が常態化しています。これでは高齢化していく地域のケアを誰がするのか心配です。だからこそ、元気な高齢者の活躍や、介護保険のお世話にならないよういつまでも元気で暮らすための取り組みが必要なのです。

そのシニアの活動の場を作っているのが、NPO 法人びば!!南三陸です。老若男女問わず学びの場を提供するほか、町民からの要望にシニアが仕事として応えるつなぎの場になっています。



理事長
勝倉 彌司夫さん
かつくら　やすお

事務局スタッフ
西城 幸江さん
さいじょう　さちえ

震災前の人口は 17,666 人、現在の人口は 13,242 人と激減していますが、課題は 3 割を超える高齢化率。復興に向かって重要なカギを握るのが、60 歳後半から 70 歳代のシニア層の動きです。以前、南三陸町には「南三陸町シルバー人材センター」があり、高齢者の得意な仕事や分野を活かした仕事を斡旋していました。町内の多くのシニア層が参加し、シルバー人材センターからマッチングされる仕事に生きがいをもって活動していました。

活動は、草刈りや植木の剪定、お墓掃除、襖の張替え、賞状の名前書き、漁業関係の加工場での軽作業など多岐にわたっていました。しかし､震災がきっかけでメンバーが減り、組織を維持できなくなったことから 2012 年 10 月に解散しました。解散後は、南三陸町の元気な高齢者が長年培ってきた知恵や技術を活かす場や元会員の交流の場として「いぶし銀倶楽部」の活動を続け、約 1 年後には、（国際協力 NGO）認定 NPO 法人ピースウィンズ・ジャパン（＝PWJ）の支援を受けて、その事務局となる任意団体のびば !! 南三陸を立ち上げました。

集える拠点「晴谷驛（ハレバレー）」

びば !! 南三陸の中心的活動を担っている事務局スタッフの西城幸江さんは、PWJ からの出向職員です。PWJ は、世界各地の紛争や自然災害によって生命を脅かされた人や、貧困に苦しむ人などを支援するために 1996 年に設立された団体です。今回の大震災でも、発災翌日から不足する物資の配布をはじめ、地元の商工会や漁協等と協力した経済復興支援、子どもたちや高齢者の心のケア、地域コミュニティの活性化などの支援活動をしています。南三陸町生まれの西城さんは、進学のために中学卒業後に町を離れましたが、震災をきっかけに南三陸町に戻り、震災前の活気ある故郷を取り戻すために働きたい！と考えて、南三陸町で支援活動をしていた PWJ に就職しました。

びば !! 南三陸の事務局は、当初 PWJ のプレハブ事務所の一角で活動していましたが、徐々に活動の輪が広が

▲晴谷驛（ハレバレー）内部の広場

▲木工ワークショップの風景

り、参加人数や活動に使用する機材や道具も増えてきたことから、各地区の公民館や集会場、ポータルセンターなどを借りて活動や講座を続けていました。しかし、高齢者の皆さんがいつでも安心して集え、楽しい活動を通じて地域に貢献できる場が必要と考え、PWJ と協働で事務局機能を持った拠点となる施設をつくることにしました。建設資金は、PWJ からの支援に加え、寄付金を集め、2015 年 7 月、南三陸町入谷に施設「晴谷驛（ハレバレー）」ができました。名称は、「晴」れやかな顔で活動し、拠点を置く入谷の「谷＝バレー」、多くの人が賑やかに交錯・交流する「駅（プラットフォーム）」のようになったら、という願いからつけられています。びば !! 南三陸は、同年 7 月 30 日に NPO 法人化し、拠点で様々な講座や活動などの企画を展開しています。

高齢者が元気に活躍できる場が復興につながる

「ハレバレー」は、みんなが楽しく集える「あそびば」、みんなが楽しく学びあえる「まなびば」、みんなが楽しく学び、遊ぶことを通じて地域の人同士の「むすびば」、と 3 つの場の提供を目的に作られ、地域の皆さんが豊かな知識、経験、技能を活用して「生きがい」「社会貢献」「健康維持・増進」「仲間づくり」の喜びを得てほしいと、びば !! 南三陸理事長の勝倉彌司夫さんは、期待しています。

現在、ハレバレーでの企画事業は、陶芸や木工、エコクラフトなどの講座のほか、月に 1 度は視察研修を実施。講座には会員を中心に毎回 10 名前後の受講者があり、受講料は 300 円～500 円です。この金額では拠点の維持費や西城さんを除く常勤のスタッフの人件費などの経費は賄えず、現状では、民間の助成金や行政からの補助金で実施しています。

今後、以前のシルバー人材センターのように仕事の依頼に応える活動を増やしていきたいという計画はありますが、会員数は、以前の半分以下の約 70 名、その 8 割が女性という構成では、これまでの草刈りや植栽の手入れなどが多い作業内容では対応が難しい、と勝倉さんは話します。

経験とネットワークがつなぐ仕事づくり

昨年の 9 月、南三陸町役場新庁舎が完成し、「開かれた町役場、住民に親しまれる町役場、気軽な町役場」を掲げ、庁舎入り口エリアに「マチドマ」と名付けた町民と町との協働空間を南三陸町が設けました。ここの一角に「マチドマカフェ」が設置され、その運営をびば !! 南三陸が担うことになりました。マチドマに町民が集い、交流する場としたい南三陸町と、地域の住民が気軽に行ける居場所を作りたいという NPO の想いが合致し、それぞれの情報や資源を基に話し合いを続け、オープンに至りました。まさに協働のカフェです。町の業務開始から 1 ヶ月遅れの 10 月 2 日にオープンしましたが、町職員や来庁した町民にも徐々に利用してもらえるようになり、安定した経営ができるよう目指しています。

カフェは、PWJ が支援する東ティモール産の美味しいコーヒーと、生きがい対策や社会参画を目的としてスタッフがびば !! 南三陸の会員さんや子育て世代のお母さんであることが特徴です。

NPO 法人びば !! 南三陸は、役員や会員など特定の地域に限定せず町内の人たちの参加により組織されているからこそコミュニティとの関係が上手く機能し、地元町民からの仕事の依頼も増える傾向にあります。法人としては元気な高齢者にいつまでも地域に役立つ機会を提供し、生きがいにつなげていきたいと考えています。

まさに「晴谷驛（ハレバレー）」は、高齢者にとって学べる場であり、仕事を得る場であるなど、南三陸町の新たなシルバー人材センターとしての役割が期待されています。

特定非営利活動法人 びば!!南三陸

＜問合せ先＞
〒986-0782　本吉郡南三陸町入谷字鏡石 4-1
TEL▶0226-25-8080　FAX▶0226-25-8400
E-mail▶info.viva373@gmail.com
URL▶https://www.viva373.com/
https://www.facebook.com/viva373

組織の舵を切ることで パートナーを見定めた

一般社団法人 Bridge for Fukushima

代表理事
伴場 賢一さん
ばんば　けんいち

震災直後の 2011 年 5 月、福島県沿岸部への物資支援やボランティアから Bridge for Fukushima の活動は始まりました。代表の伴場さんは福島県出身で、発展途上国の開発支援の経験を持ちます。相馬市内の倉庫を借り、そこを拠点として 2014 年 9 月まで物資支援は続けられました。被災地のニーズの変化に合わせ「被災地へのツアー事業」や「首都圏企業と NPO とのマッチングを行う結の場事業」など様々な取り組みを生み出してきました。

現在は「リーダー人材育成」に主軸を置き、日々仲間と試行錯誤をしながら様々なチャレンジをしています。

仕組みづくりよりも、変化するニーズに応えることを優先

緊急救援期を経て、その役割は刻々と変化するニーズにスキルと経験、首都圏の企業とのネットワークをもとに一つひとつ応えていくことに変わっていきました。多くの団体が特定の専門性をもとに仕組み化や事業化を模索する中、ニーズに応える支援を優先し、そうした活動は助成金を多く活用しました。

様々なつながりの中で挙がる現場の要望に応える形でプロジェクトを構想し、事業化できるものや事業収入を見込めるものを見極めつつ、常に、新たなチャレンジをするための研究開発費を自主財源で確保してきました。助成金などにより小さくチャレンジしたものを、成果とエビデンスを踏まえつつ行政に提案し、それが翌年に予算化され、行政から委託事業を受ける形で規模を大きく実施していくこと、その流れを助成金事業からのステップアップとしていたと伴場代表は言います。

様々な連携・協働がつながり、新たな発展に

2012 年に開始したツアー事業は、福島沿岸地域で復興に正面から向き合う「人」を資源として被災地を共に廻り語り合うもので、ふくしま復興かけはしツアーとして十数回にわたり開催し、1,600 名を超える参加者が避難区域見直し後の相双地区の今後についてともに考える機会となりました。

2013 年には相双地区ヒューマンツーリズム実施協議会が発足し、福島県相双地方振興局から福島県地域づくり総合支援事業（サポート事業）助成を受けつつ、福島交通観光（株）などの旅行会社と協働し、ヒューマンツーリズムを推進しました。また、2014年には相双地区ヒューマンツーリズム実施協議会が主体となり、福島ラーニングツーリズムのモニターツアーを実施しました。

相双地区の人々は「地震」「津波」「原発事故」という全ての前提が覆される未曾有の緊急事態に見舞われ、正誤の判断がつかない暗中模索状態の中、意思決定を繰り返してきました。そうした経験を学びのコンテンツとして、想定外の緊急事態における組織行動のあり方を学ぶケース教材を作り、企業や自治体、公的機関の防災や研修担当者向けに学びの場を作りました。

この事業は、前出の福島県の助成を活用し、実践的

▲Bridge for Fukushima の大学生合宿の１コマ

▲高校生による日中交流事業あいでみ　上海復旦大学付属高校にて

な学修プログラムの開発・運営を行う株式会社ラーニング・イニシアティブとの協働のもと、Bridge for Fukushima が事務局となり運営を行いました。

リーダー人材育成を主軸に

これからの福島の未来を創るのは「ゼロからイチを生み出せるリーダー人材（雇用を作れる人材）」であり、そうした若者を育成することに組織の主軸を置きました。それまでも、高校生や大学生を対象とした学びの機会づくりやサポートを様々な形で行っていましたが、積極的に関わりを持ち、試行を繰り返しました。宮城と福島の農業高校に呼びかけ、参加した 7 つの高校の生徒を対象に、既存の科（農業生産・食品加工・農業ビジネス）の枠組みを越えた 6 次産業化に取り組む人材育成プロジェクトをビジネス変革・コンサルティングのアクセンチュア株式会社とともに実施しました。

このような学校教育現場と連携をした取り組みがある一方、自ら住む地域をフィールドとした地域社会課題解決に取り組むプロジェクトも数多くサポートしています。

高校生 6 名が企画メンバーとなり、座談会形式で自ら選んだ社会人講師の話を聴く「かっこいい大人の話を聞く会」を数度にわたり開催（一部合宿形式）した取り組みでは、建築家やプロダクトマネジャー、新聞記者、医師、経営者など様々な大人と高校生との出会いの機会づくりを行いました。高校生自身が身近な問題や事例を素材としながら具体的な解決に向けてチーム学習を行っていくプロセスを一つひとつサポートすることで、彼ら自身の経験値を上げ、福島の将来を担うリーダー人材の育成につなげようとしています。

これらは「JT NPO 応援プロジェクト」や「東日本大震災復興支援財団 子どもサポート基金事業」などの民間助成金を数年にわたり活用できたことで実現し、現在でも継続をしている取り組みも多くあります。

またそれらの実績により、復興庁から復興・創生インターン事業を受託することになり、被災地の企業を対象とした実践型インターンシッププログラムのコーディネートを担い、これまでの活動で関係性のある福島県内の企業へ約 1 ヶ月間、学生同士が共同生活を送りながら経営者と協働して解決に取り組むプログラムを提供しています。

2014 年 3 月には、高校生や大学生、社会起業家のワーキングスペースとしてコミュニティスペース Palette をオープン。伴場代表自身の直感と経験、外部とのつながりを元に小さく試行し、実施・検証・エビデンスとともにパッケージ化をし、公的な資金や協力を得られた際はスタッフが担い手となり展開をしていきます。

舵を切ることでパートナーが定まった

「将来の福島を担える、福島に雇用を作れる人材を育てる」と舵を切ることで、「パートナーにすべきは地元の中小企業の経営者であると定まった」と伴場代表は言います。地元の経営者へ働きかけを行い、2017 年 12 月には福島商工会議所主催で「第 1 回福島市の未来を高校生で考えるまちづくりワークショップ」が実現しました。「20 年後の福島」を高校生と商工会議所メンバーがともに考える場を通じて様々なアイディアが生まれ、具体的な実施に向けて動くものや市や県へ提言をする流れも出てきています。この事業をきっかけとして、人材面や資金面など地元の経営者が参画しやすいプラットフォームを作ることを目指しています。

伴場代表は、何かに積極的にチャレンジをし、結果失敗をしても、その経験自体が成長につながる、だからこそ、学校以外の場所で本気で関わってくれる大人との出会いを創り、行動と結果に真摯に向き合える経験の場を地域に仕組みとして根づかせることが大事だ、と話します。Bridge for Fukushima は、復興支援という文脈を越え次のフェーズに向かっています。

一般社団法人 Bridge for Fukushima

＜問合せ先＞

〒960-8061 福島県福島市五月町 2-22

TEL▶024-503-9069

E-mail▶info@bridgeforfukushima.org

URL▶http://bridgeforfukushima.org

食堂運営から地域コミュニティの拠点へ

一般社団法人 ワタママスマイル

代表理事
菅野 芳春さん
すがの　よしはる

震災直後、2,000 人を超える避難者の生活の場となった渡波小学校。ワタママスマイルの活動は避難所運営の炊き出しから始まりました。閉鎖までの 7 ヶ月間、自ら被災をしながらも炊き出しを続けてきた石巻渡波のお母さんたちが担い手となり、現在は地域の方々へのお弁当の宅配事業を展開しています。

2014 年には新たな拠点を構え、配食サービスに加え、市民農園の提供や収穫祭の実施、地域の方々と連携した地域食堂の運営などを行い、お母さんたちの試行錯誤が日々続いています。

避難所の炊き出しから始まったワタママ食堂

石巻市渡波地区は牡鹿半島の基部に位置し、震災時は 1/3 の家屋（2,200 戸）が全壊になるなど、大きな被害を受けた地域の一つです。震災後すぐに渡波小学校が避難所になり、最大で 2,000 人もの人々が避難所での生活を余儀なくされる中、開設初期の頃から自治組織が作られ、避難者自ら協力をしながら炊き出しなども行っていました。しかし、1 ヶ月ほどすると皆で決めた役割が回らなくなり不公平感が生まれました。近隣の在宅避難者を含めた 3,000 食を超える日々の炊き出しが負担となり自衛隊に相談するも断られ、そこから当時外部支援で避難所に入っていた青年海外協力隊の OB・OG で立ち上げた「協力隊 OV 有志による震災支援の会」へ協力の要請があったと、代表の菅野さんは言います。菅野さんは、震災時は青年海外協力隊 OB として途上国支援の取り組みに関わっていました。山形県出身ということもあり、震災後すぐに仲間とともに渡波小学校避難所のサポートに入りました。

菅野さんたちは、避難をしている人々に「自治力」を求めました。炊き出しを担ってもらう人を避難所の中で公募し、有償ボランティアとしてその役割を果たしてもらう方法をとりました。キャッシュフォーワークと呼ばれる方法です。仕事をすることによって「ありがとう」と言ってもらえる環境は関わったお母さんたちの笑顔になり、避難所で暮らす他の人々が前向きな気持ちを持つ後押しとなりました。

そうした活動を続ける中、避難所が閉鎖する 10 月、関わっていたメンバーに気持ちの変化が表れました。「避難所がなくなることによって困る人たちがたくさんいるのではないか、そうした人々のために何かできないだろうか」という思いです。一致団結し、震災で使えなくなっていた飲食店の調理場を借り、仮設住宅に住む高齢者や住宅の 2 階で生活する人々などへお弁当を届ける「ワタママ食堂」をスタートさせました。ニーズは大きく、半年ほどで事業は軌道に乗りましたが、調理場として借りていた建物が予定よりも早く取り壊されることになり、活動を休止せざるを得なくなりました。この時の不完全燃焼の思いが 2 年後の再

▲「渡波地域食堂」でのケーキ作り！

▲ワタママ食堂でのお弁当作り

オープンにつながります。

継続的な経営主体へと転換を図った 3 年間

2014 年 4 月、「ワタママ食堂」が再オープンしました。海沿いの場所を借り、調理場と食堂を備えた建物を建て、お母さんたちが笑顔で事業を再開しました。

再開の背景には、2013 年から 3 期にわたり支援を受けた「タケダ・いのちとくらし再生プログラム」（武田薬品工業株式会社が資金提供、日本 NPO センター運用）の存在があります。協力隊 OV 有志による震災支援の会による外部主体の活動から、地元に根ざした継続的な経営主体へと継承をする 3 年間と位置づけ、主事業の経営安定化と既存の地域団体や活動との連携協働を段階的に進めました。

1 年目は 6 名の女性の雇用からスタートし、2 年目は 9 名、3 年目はシニア男性 3 名の雇用に加え、NPO 法人 Switch と連携し、引きこもりの若者の就労支援説明会を開催しデータ入力などの 8 名への働く場所の提供につなげました。そうした雇用を支えるマネジメント人材・チームの育成を強化するとともに、主事業である配食事業の質を高めるために 4 名が食品衛生管理責任者の資格を取得し、健康に配慮したメニュー開発と信頼の獲得に努めました。様々な努力が実り、採算ラインである 200 食の提供を達成することができました。この間、地域にも様々な状況変化がありました。仮設住宅から復興公営住宅へと転居が進む中、石巻市社会福祉協議会や仮設住宅自治会などと連携しながら配食を通じて高齢者（約 20 世帯）の見守り支援も行いました。

地域に必要な役割として、溶け込んでいくこと

2016 年 9 月には地域食堂「渡波たべらいん」を開設し、生活困窮家庭の子どもを中心に食事支援と居場所づくりを始めました。「タケダ・いのちとくらし再生プログラム」の助成金を活用し、地元の 10 団体が実行委員会を組み、世代を超えて一緒に楽しく食事をする場として開催し、2017 年 6 月からは毎週開催しています。それぞれが役割を持ち合うことで協働での運営ができるようになりました。互いに関わり、気づき、補い合いながら、そこに住む人々が心地よく生活できるよう、地域全体で考える視点が確実に生まれ、経験として積み重なってきています。

2017 年は、ワタママ食堂の運営全体をスタッフに任せてきたと菅野代表は言います。自分たちで話し合い、問題があれば一つひとつ解決のための方法を模索し、日々チームで取り組むことです。避難所での炊き出しからのメンバー 3 人を含め、現在では総勢 8 人のパートタイムスタッフで運営をしていますが、段階的にチームでできることを増やしてきました。当事者意識が強くなることで現場ならではの試みも始まり、市民農園で収穫祭を行うなど、地域に根ざしたコミュニケーションの場づくりも進めています。

菅野代表自身は青年海外協力隊の OB としてこの地域に入り、仲間とともに国際緊急支援のノウハウを伝え続けてきました。緊急時の食の支援からワタママスマイルは生まれましたが、お弁当の販売と食堂は、地域になくてはならない事業として自立化の段階まで進めることができ、自身の役割は終えつつあると菅野代表は言います。まさに、渡波の地域に根ざした取り組みとして、地域に溶け込んで地元民が経営していく段階がきています。

一般社団法人 ワタママスマイル

＜問合せ先＞
〒986-2122　宮城県石巻市幸町 2-3
TEL▶0225-98-4701
E-mail▶watamamasmile@gmail.com
URL▶http://watamamasmile.org

復興支援NPOが継続活動していくための９つの前提要件

経営コンサルティング
波多野事務所
代表
波多野卓司 さん

『世の中には、がんばりたくてもがんばれない何かの状況を背負い生きている人もいる。せめて今がんばれる者は、その人たちを支える責任がある』……復興支援に立ち上がったNPOの多くは、そのような思いに支えられてきたことでしょう。そしてバラバラになった地域での新しい共同体づくりに、日々取り組んでおられます。

その再興は、永い目で見るならば、『一人でも生きていられる＝助けあいで生きていく』という共同体をどうつくっていくか？という視点に行き着くように思います。

ではその『助けあいの共同体』が永く続いているケースでは、いったいどんな前提となる共通項が備わっているのでしょう？

①やってはいけないことの厳格な基準（理念）が存在する
②違う価値観の人たちが、ああでもないこうでもないと交わっている
③様々な世代の人たちが関わっている
④お互いのことをみながよく知っている（コミュニケーションが密）
⑤泣いたり笑ったり怒ったり喜んだり、日々、あれこれ事件が起きている
⑥ときに怠けても、許されるスペース（キャパシティ）がある
⑦みなで乾杯する『ハレの日』がある
⑧どれほど小さくとも、一人一人が自分の役割／舞台を預かっている
⑨さまざまな『プロ』が存在する

これらを大括りで言うと、『組織の多様性』ということになるでしょう。

けれど、組織は『硬直化する』という宿命的な病を抱えています。だからこそ、日々の現場で、これら『９つの前提要件』をいつも胸の片隅に置きながら、トラブルの修復を繰り返す。その道程でこそ、『縦横斜めにつながった多様な共同体』は、根をはるように、強く育っていくのでしょう。

平成 29 年度宮城県 NPO 等の絆力を活かした震災復興支援事業

『復興』の先を考えるミーティング in 石巻・気仙沼

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 世界を変えるための17の目標

～ SDGs で見るわたしたちの地域社会～

石巻会場 日時：2 月 15 日（木）13：30 ～ 16：30
会場：石巻専修大学 4 号館 4102 教室・4103 教室

気仙沼会場 日時：2 月 19 日（月）13：30 ～ 16：30
会場：気仙沼市役所ワン・テン庁舎 2 階大ホール

東日本大震災からまもなく 7 年。
すでに震災復興は、一過性のものではなく、長期的視点を要する課題へと変わっています。
このたび企業、NPO、コミュニティなど、地域の担い手同士がともに『復興』とその先を考えるための交流会を開催します。
長期的視点で地域を考えるツールとして、SDGs についての講演と事例紹介もあわせて行います。

当日はみやぎソーシャルビジネス支援ネットワークによる相談対応も行います。ご希望のある方は参加申込時にその旨をお伝えください。相談内容は以下の内容を予定しております。
【各種助成金、組織づくり、NPO 法人設立手続き、許認可の取得、資金調達など】
※相談内容については、都合により変更となる場合がございます。その際は、後日対応いたします。

【プログラム】

・はじめて学ぶ SDGs・
新田 英理子さん
一般社団法人 SDGs 市民社会ネットワーク 地域連携アドバイザー
・SDGs と地域協働を理解するための事例紹介・
〈石巻〉 橋本 大悟さん（一般社団法人りぷらす 代表理事）
千葉 裕貴さん（社会福祉法人中山福祉会 常務理事 / NPO 法人中山街づくりセンター 理事）
〈気仙沼〉 戸野 憲一さん（株式会社デンソー 新事業推進部セキュリティ事業室 担当課長）
金藤 克也さん（一般社団法人さとうみファーム 代表理事）
・『復興』の先をともに考える交流会・

お申込み、お問合わせはお電話で
認定 NPO 法人杜の伝言板ゆるる **TEL 022-791-9323**
主催：宮城県　共催：石巻市・気仙沼市

Vol. 1 は県ホームページで公開しています https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/kyosha/fukkoing29.html

復興ing NPO等の震災復興取り組み事例集 2018.1 vol.2

発　行:宮城県環境生活部共同参画社会推進課
〒980-8570
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
TEL：022-211-2576

企画・編集:認定特定非営利活動法人 杜の伝言板ゆるる
〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡3-11-6 コーポラス島田B6
TEL：022-791-9323　FAX：022-791-9327
E-mail：npo@yururu.com　URL：https://www.yururu.com/